

地方だより

福岡管区気象台

10年1日のごとしといわれてきた気象測器のなかにあつて、最近になってオートメーションの最先端をいく新鋭器械が採用されるようになったのはうれしいことです。その一つはレーダーで、さる昭和30年9月に、福岡市の南17km、福岡、佐賀の県境にそびえる背振山の標高960mの峰上にすえつけられてから今日まで、台風や大雨の観測予報に大きな役割を演じています。このほゞさらに高層観測施設が完成し、国産の自動追跡式レーウィンゾンデJMA-DSSAによる観測を開始したので、西日本の気象観測網は一段と強化されたわけです。

背振山のレーダー観測室は、いわばピラミッドの頂点のような場所に立っているの、地上からその全体をカメラにおさめることはなかなかむづかしいのですが、ここに掲げたのは、飛行機から写した珍らしい写真です。高さ6mの鉄塔上にとりつけられた直径3mのバラボラアンテナから発射される、波長5.7cmのレーダー電波で九州一円の降雨域をとらえ、そのレーダー像は山上で観測されると同時に、マイクロウェーブにのせて福岡管区気象台にも送られてきますから、気象台の予報官は、いながらにしてなまのレーダーエコーを見ることができるわけです。レーダーをなるべく高いところに取りつけた



写真2 高層観測室

いという要求と、観測結果をなるべく早く正確に予報官に伝える必要とを最も理想的な形で解決したこのレーダーリレー方式は、世界でも劃期的な試みといふことができます。ところが庁舎の方はご覧のとおり木造のおそまつなもので、それですてさへはげしい山の気象にさらされては、ここに常時勤務する2名の観測者の苦勞も思いやられます。それでも年に何回かは、山で道を失った人々の避難所の役目を果して、予想しなかった方面からの感謝の声を聞かされることがあります。なお、この地の利を利用して、近く離島測候所や気象通報所と管区気象台とを結ぶ超短波の無人中継機が取り付けられる予定です。

一方、高層観測室の方も、測器の性能が向上するにつれて、観測所の立地条件はますます厳格になり、当気象台の構内では良質の観測を確保することができませんので、気象台から西南西約2km離れた場所を選んで建設されました。大都市ではゾンデ観測に要求される広大な敷地は望むべくもなく、960坪といえはぜいたく過ぎるくらいだと思います。写真でご覧のとおり、鉄筋コンクリート平屋造りの庁舎に、高さ10mの塔をそなえた近代的なスマートな外観は、付近のながめに異彩を放っています。従来は米軍に依存していた北九州のゾンデ観測を一手に引き受けることになり、一同はりきっています。



写真1 背振山レーダー観測所 (朝日新聞社提供)

